
となりの悪魔くん

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

となりの悪魔くん

【Nコード】

N7695F

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

ひとつ屋根の下で暮らす同居人は、主夫で小姑でちょっぴり変態な悪魔！？ おまけに空から天使も落ちてきたりして、女子高生・陶子の日常はすっかり波瀾万丈です……。家族以上恋人未満なふたり（+α）のどたばたライフ。

となりの悪魔くん

我が家には悪魔が住んでいる。

などと言つと、痛々しくてたまらないと言わんばかりの目で見られたり、「病院に行ったほうがいいんじゃない？」と優しく忠告されたりするのがオチだ。

だがこれは嘘でも冗談でも妄想でもなく、歴然たる事実だ。

もう一度言おう。我が家には悪魔が住んでいる。

彼の名前はメフィストフェレス。かの有名な『ファウスト』に登場する悪魔と同名だが、まったくの別人らしい。本人曰く、「俺あんなジジじゃねえし。まだぴちぴちの百十代よ？」とのこと。

一世紀以上も生きていてまだ『ぴちぴち』なんていう表現を使う悪魔の常識にひと言申したかったが、そもそも悪魔自体が常識極まりない存在なので黙っておいた。

メフィストフェレスが我が家の居候となったのは、およそ一年前とあるオカルトマニアに喚び出されたのだが、興味半分のお遊びが成功するとは思っていなかった召喚者に逃げられ、魔界に帰れなくなってしまったらしい。

行くあてのない悪魔は、なぜかまったく無関係なわたしの許に転がりこんだ。警察沙汰にまでなりかけた押し問答の末、家事一切を引き受けるという条件下、メフィストフェレスはめでたく我が家の家政夫の座に収まったのである。

最初の頃はいったいどうなることやらと不安で胃痛持ちになりそうだったが、まったく慣れとはおそろしいものだ。たとえ人外どころかこの世のものではないとしても、ひとつ屋根の下で暮らしているうちにどうでもよくなってくるらしい。当の本人がやたらと人間くさくて所帯じみていたせいもあるのだろうか。

「おいこら、陶子^{ちゆうこ}。さりげなくシチューからグリーンピース抜いてんじゃねえよ」

「む」

いつもと同じふたりきりの夕食。向かいの席に座ったメフィストフェレスは、わたしが食器の隅に積み上げたグリーンピースの小山をスプーンで指した。

仕事人間の両親は今日も帰ってこない。ご苦労様なことである。

「高二にもなつて好き嫌いすんな。小学生じゃねえんだから」

「うるさい小姑」

「おーし、よく言った。デザート焼きプリン没収決定」

「どうしてそうなる！」

悪魔とは概して、思春期の子どもを持つ母親のように口うるさいもののだろうか。だとしたら魔界はおそろしく住みにくい場所に違いない。

メフィストフェレスの容貌は、悪魔でありながら至って平凡だ。

眉間に皺を寄せようと少しも違和感がない。

「だったら残さず全部食え。それとも何か。俺が愛情こめて作った料理を食べられないと？」

「ぐ」

わたしは詰まった。メフィストフェレスの、ナイフで入れた切れこみのような目の奥を冷たい光が走る。

本性をちらつかせるなんて卑怯な。もはや脅迫だ。本能的な恐怖に命じられるまま、わたしはグリーンピースの小山にスプーンを差し入れる。一瞬のためらいのち、死地に赴く戦士のような気持ちで掬い取った分を口に含んだ。

すると、メフィストフェレスの顔にやわらかな微笑が浮かぶ。

「やればできるじゃねえか」

……悪魔は飴と鞭の使い方にも長けているらしい。

グリーンピース独特の食感と微妙な苦味に耐え、涙目になりながら睨みつけると、ますます表情が優しくなった。

悔しいことに、どうやらメフィストフェレスのほうが一枚も二枚も上手のようだ。思えば、最初から負けっ放しである。どうしてわ

たしを宿主に選んだのか、彼は困ったような顔で言ったのだ。

——あんたがさびしそうだったから

あんたのために飯作って、一緒に食べてやんなきゃって思った、
という言葉に泣いてしまったのは、一生の不覚だ。

我が家には悪魔が住んでいる。

彼の名前はメフィストフェレス。なんとも悪魔らしくない悪魔だが、それが彼たる所以なのかもしれない。

メフィストフェレスの隣で過ごす日々は、問題は多々あれど、それが当たり前だと思えてしまえるぐらいには、幸せだ。

悪魔くんの恋愛指南（前書き）

旧サイトのリクエスト企画作品です。リクエストしてくださった梶原ちな様に捧げます。

悪魔くんの恋愛指南

得てして、人にはだれしもとうてい克服しがたい苦手なものが存在する。

わたしの場合、それはグリーンピースであつたり、数学であつたり、はたまた恋愛話——いわゆる恋バナであつたりする。

人生とはうまくいかないものだ。

小姑な居候によつて週に一度は必ず食事にグリーンピースが紛れこんでいるし、日本の高校教育がひっくり返らぬ限り数学の授業がなくなることはないし、女に生まれた以上友達づき合いのなかで恋バナを避けて通ることは叶わない。

そして今日も今日とて、わたしは手強い敵に立ち向かう。

「陶子つてさあ、好きな人とかいないの？」

——来た。

なぜ女の子はこうも恋バナが好きなのだろうか。顔も憶えていないような同級生の修羅場からはじまり、他人様ひとの——つまりどうでもいい恋愛について、すでに三十分近く話しこんでいる。そろそろ矛先が身内に向く頃かと思うと、よりにもよつてわたしが標的になるとは。今日は厄日だ。

「そついや陶子つて、全然そついう話しないよね。ってか、この手の話題になると完全に沈黙しない？」

「うわ、めっちゃ気になるんですけどー！？ ほらほらこの際白状しちゃえ、吐くまで帰さないぞ」

……ああ、どつと疲れが。ため息が重い。

水を得た魚にたとえるべきか、友人たちは実にいきいきと表情を輝かせている。恋バナの何がやって、この息苦しいほどのテンションの高さと、

「白状するも何も、別にそついうやつはいない」

「ええ」？

——あからさまに向けられる失望と不満。

「つまらないなあ。まさか隠してんじゃないでしょうねえ？」

「隠すものなんてない。これまでいたこともないのは、れっきとした事実だ」

「彼氏欲しいとか思わないわけ？」

「必要ない」

嘘をつくなど言っておきながら、友人たちはますます面白くなさそうな顔をする。胸の奥が詰まる居心地の悪さ。こんなときだけは彼女たちから離れたくてたまらない。

「やっぱ陶子は変わってるねえ」

「淡泊っていうか、浮世離れしてるカンジ？」

「そうそう、なーんかひとりだけ違うもの見てるみたいな」

無邪気な言葉に耳を塞ぎたくなる。悪意がないからこそ残酷な線引きに、わたしは放っておいてくれと内心で毒づいた。

わたしはどこか異質であるということを、わたしが一番知っている。

みんなが好きなものを好きになれない、同じものになれぬ疎外感。物心ついたときから、時が経るにつれて強まっていくもの。

それでも、わたしが孤独を選べず、人の輪から外れられぬのは。

「陶子はさ、いろんなものに対する興味が薄いのかもね」

怖いからだ。

からっぽになってしまるのが怖いからだ。ひとりぼっちのさびしさを、虚ろな悲しみを味わいたくないからだ。

どんなに苦痛でも、ぎりぎりのところで踏み留まっている。過剰分だとわかっていても手放せず、溺れる漂流者のようにしがみついている。

「もう少し積極的になってみたら？ 恋をしたら、いろんなもんが変わると思うよ」

痛くて優しい友人の忠告に、わたしは項垂^{うなだ}れて目を伏せた。

「なあ、メフィスト。『好きな人』ってどうすればできるんだ？」
「……は？」

友人たちと別れたあと、わたしは帰り道で考えに考え抜いた。どうすれば好きな人ができるのか、どうすれば恋ができるのか。だが初恋すら未経験のわたしに名案が思いつくはずもなく、甚だしく悔しいが居候に知恵を借りることにした。

この居候、齡百歳を超える悪魔である。名をメフィストフェレスといい、微妙に長つたらしいのでわたしはメフィストと呼んでいる。常々「俺はまだぴっちぴちの若者だ」と主張している彼だが、人間にすればギネスブックに世界最高齡として申請してもおかしくないお年頃だ。わたしの周辺ではだれよりも人生（悪魔生？）経験豊富なはずである。

「陶子……おまえなんて言った？」

「『好きな人』はどうすればできるのか、と訊いている。あ、ちなみにこの『好きな人』っていうのは恋愛対象のこと——」

「わかった、わかったからとりあえず黙れ」

手にした包丁を落としそうな勢いで固まっていたメフィストフェレスは、呆れたような疲れたような、どこことなく不機嫌そうに眉をしかめた。まな板の隅に積まれた人参にんじんや馬鈴薯じゃがいもを見ると、今晚のメニユーはカレーライスらしい。

「どうしてそんな質問をするに至ったか、まずその理由を述べろ」

「今日、学校で友達に言われたんだ。好きな人もいないなんておかしい、恋をすればいろいろなものが変わるって」

「……最近のガキはずいぶん偉そうな口を叩くようになったもんだ」
メフィストフェレスは薄く笑った。ひんやりとした声音には、なぜか怒気がこもっている。

包丁を置いた彼は、わたしの正面に向き直ると、結構ある身長差を埋めるように顔を覗きこんできた。ナイフで入れた切れこみのよ

うな目を細める仕種が、やけに悪魔じみている。

「いいか陶子、たかだか十何年生きたぐらいの小娘に語れるほど恋は簡単なものじゃない。だいたい恋っていつのは『する』もんじゃなくて、ある日突然『なる』もんだ」

「なる？」

「ああそうだ。よく『恋に落ちる』とか言うだろ。まさしくあれだな、唐突に落ちる……落とされるんだ。天から降ってくるみたいに、本当に、不意を衝いて現れる。思いがけない災難みたいなもんだ」
わたしの頭に浮かんだのはびっくり箱だった。何げなく蓋を開けたらとんでもないものが飛び出してくるような、未知の存在。

わかるような、わからないような。

「……やっぱりよくわからない」

「そりゃそうだ。実際に経験しなきゃ理解できないだろうよ」

メフィストフェレスはちよつとまなざしをゆるめ、するりと頭を撫でてきた。

「それに、おまえは別に変わる必要はないだろ。人間ってのは多かれ少なかれ変わっていくもんなんだ。これから先、いやでも変わっていくさ」

「……そういうものなのか？」

「ああ。それが年を取る……大人になるっていうことだ」

だからまだ、おまえはそのままでいい。背伸びなんかしないでいいんだよ。

優しくささやかれる言葉は、まるで祈りのようにも聞こえた。わたしは強張っていた心から力が抜けていくのを感じながら、ふとメフィストフェレスの手が頬へ下りてきたことに気がついた。

視界の翳りが濃くなり、見つめてくる視線が近く、強くなる。頬に触れる掌を妙に熱く思い、わたしは友人たちとの会話のときのものとはまた違った居心地の悪さを覚えた。

なんだろう。項^{うなじ}を羽根でくすぐられるような、このこそばゆい感覚は。ふわふわと足元が浮わついて落ち着かない。

「メ、メフィスト？」

じわじわと顔が火照っていくなか、メフィストフェレスがふっと、ひどく切ない表情を見せた。胸の奥にキリリと痛みが走る。心臓につながる血管を締めつけられるような錯覚。

「いつか、おまえが大人になったら」

悪魔の唇がやわらかな弧を描く。見慣れているはずの微笑みは、まるで知らない者のようで。

喉が渴くほど甘く、膝の裏が震えるほど妖艶な。

「——俺が、恋を教えてやるよ」

匂い立つような『男』を感じさせるものだった。

めまいがした。

ゆっくりと世界が反転する。回る回る世界のなかで、腰の抜けたわたしを悪魔の腕が抱き寄せたことだけがわかった。

驚くほどゆるやかな、それは世界の变革のはじまりだった。

悪魔くんとスイート・ハロウィン

「ただい……ま？」

いつものように帰ってみると、なぜか吸血鬼に出迎えられた。

後ろに流された黒髪、塗りこめたような白い肌。鮮やかな赤い唇からは鋭い牙が覗いている。襟の立った漆黒のマントをふわりと広げ、吸血鬼はうつとりするほど優しく微笑んだ。

「Trick or treat？」

甘い低音が流暢な英語をささやく。ドアを開けた姿勢のまま、わたしは腰砕けになりかけた。

「ちょ、ちよつと待って」

確かに我が家には居候がいるが、彼は吸血鬼ではなく悪魔のはずだ。

「……何やつてるんだ、メフィスト」

「見てのとおり」

くらくらする頭を押さえながら尋ねると、そのメフィストフェレスはけろりと答えた。

「……吸血鬼？」

「正確にはドラキュラ伯爵。似合ってるだろ？」

得意げな笑顔でくると回ってみせる。マントの下は中世ヨーロッパの貴族を思わせる礼装という手のこみようだ。

「どこでそんな衣装買ったんだ……」

「ネット通販。いや、ホント便利で面白い世の中になったよなあ。ハロウィン用の衣装つつつてもいろいろ売ってるんだぜ？ 狼男とかフランケンシュタインとかミイラ男とか。しかも全部手作り！」
それってコスプレってやつじゃないのか、と言いかけてやめた。
とつくに知っていそうで怖い。

とりあえずドアを開けっ放しにしておくわけにもいかず、わたしは後ろ手に閉めると、その場にずるずるしゃがみこんだ。本気で頭

痛がしてきた。

「おいおい、大丈夫か？」

「だれのせいだよっ」

覗きこんでくる吸血鬼の顔に思わず後退する。顔立ちを強調するメイクは舞台役者のようだ。

粉っぽい化粧品のおいと、微かに混じる香水の甘い香り。本当にここにいるのはメフィストフェレスなのだろうか。

背中がドアに当たる。いつの間にか、ドアとメフィストフェレスに挟まれる形に追い詰められていた。

「……なあ、陶子」

どうして両腕をドアについて囲う。どうしてそんな静かな声を出す！

スカートの下の固く冷たい感触に、早くどいてくれと切望する。

^{たたき}三和土は座り心地が最悪なのだ。

必死に現実逃避を図っていると、

「おまえ——照れてるのか？」

悪魔は容赦なく直球を投げてきた。

「照れてなんか……」

「顔赤いし、視線泳いでるぞ」

近づいてくる唇に、反射的に顔を背けてしまう。メフィストフェレスは喉を鳴らして笑った。

「おまえ、この間からずいぶんいい反応するようになったよな」

嬉しげな口調に腹が立つ。自覚した途端、あっという間に耳まで熱くなった。

「俺が恋を教えてやるよ」などという意味深長な言葉をもらって以来、たびたびこうした目に遭わされている。からかっているのか本気なのか、初恋も未経験なわたしには判別不能だ。

「メフィスト、さっさとどいてくれ。そろそろお尻が痛くなってきた」

「お菓子くれたらな。ほら、trick or treat？」

押し返そうとした両手もやんわりと絡め取られ、いよいよ退路を失った。もう一度くり返された問いが吐息とともに首筋をくすぐり、わたしは叫びそうになった。

「ち、痴漢っ。変態、セクハラだ！」

「吸血鬼ってそんなもんだろ」

ほとんど抱き締められるような格好で、ほらほらと促される。鼓膜を震わせる心臓の高鳴りに耐えきれなくなり、ぎゅっと目を閉じた。

「……おっ」

「お？」

「お菓子、持って、ない」

昼休みにチョコレートを食べてしまったことを激しく後悔した。だがもう遅い。すべてはあとの祭だ。

「ふーん。そうかそうか」

吸血鬼のにやにや笑いが目に浮かぶ。バサリという衣擦れとともに、わたしはマントに包まれた。

「じゃあしょうがない。お菓子の代わりに陶子をいただくか」

夜のような闇のなか、甘美な抱擁に捕らわれる。

——ああ、気絶寸前。

悪魔くんとクリスマス・ラブソディ

子どもの頃からクリスマスなんて大嫌いだった。

だれもいない暗い家。ラップのかけられた冷たいご馳走とクリスマスケーキ。『いい子で留守番しててね。メリークリスマス』というメモが添えられたプレゼント。あたたかい、楽しい思い出なんてひとつもない。

涸れ果ててしまった涙を数える、ひとりぼっちの夜——これからもずっとそうだと、思っていた。

「メリークリスマス！」

ぱあん！ とクラッカーが弾け、色とりどりの紙テープと紙吹雪が降り注ぐ。トナカイの角とピエロのような赤い団子鼻をつけたメフィストフェレスが、「いえーい！」などとVサインを突き上げていた。おまえは合コンでほろ酔い機嫌の大学生か。

「ほらほら、どうしたのサンタさん。テンションが低いですよ！」

座卓に足を乗せるな、足を。わたしは肩に積もった紙切れを無言で払い落とした。

「もー、どうしちゃったのよこの子は。何がそんなに気に入らないのかな？」

「……メフィスト」

「んー？」

わざとらしく耳に手を当てている悪魔に、にっこりと笑ってやる。

「おまえ、超うざい」

「ひどい！ とーこたんてばひどい！ こんなに俺が一生懸命盛り上げてるのに！」

「とーこたん言うな！ いい年こいた悪魔がかわいこぶるんじゃない。気色悪いわ！ だいたいこんな格好させられて喜ぶやつがどこにいる！？」

「いいじゃん、似合ってるんだし。赤いミニスカから覗く真っ白な

ふとももに、不肖このメフィストフェレス、思わずハアハアしちや……」

「——っんの変態！」

座布団代わりに敷いていたクッションを力の限り顔面にお見舞いしてやると、赤鼻のトナカイはくぐもった奇声を上げて背中から倒れた。一生そのまま沈んでいろ。

ため息とともに重い視線を落とすと、半ば剥き出しの太股が目に見えこんできた。慌ててミニスカートの裾を引っ張る。

夜の街にきらびやかなイルミネーションが浮かぶ十二月二十四日。我が家では居候の主張によりクリスマスパーティーが催されていた。ふたりつきりというのはいつものことだ。しかし、なぜサンタクロースの衣装を身につけなければならないのかわからない。しかもグラビアアイドルがバラエティ番組で着るような、きわどいデザインのもの！

顕になった肩と腕、おそろしく丈の短いスカートが季節感をまるごと無視している。ふわふわの白いファーでかわいらしく縁取られていたりするが、まったく意味がない。寒い、寒すぎる。

ハロウィンで味をしめたのか、最近メフィストフェレスの変態ぶりがアクセル全開で加速している気がする。悪魔の生態がわからなくなってきた……。

「かわいい娘こがかわいい服を着るのは自明の理だろ」

起き上がったメフィストフェレスがクッションを弄びながらぼや

く。ああもう、何を言うのか！

一気にのぼせたわたしは座卓に突っ伏した。

「おまえ、最近おかしいよ……」

「いやいや、こんなもんでなめてもらっちゃ困るぜ」

お願いだからなめさせてくれ。ご馳走に手をつける前から胸までいっぴいで倒れてしまいそうだ。

本当は、知っている。

だれかと一緒に過ごすクリスマス。くだらない、笑ってしまうよ

うな馬鹿騒ぎ。優しい悪魔からのクリスマスプレゼント。

わたしは腕に顔を伏せたまま呻いた。

「……わたしのこと甘やかしすぎだ、おまえ」

「いいんだよ、今までずっと我慢してきたんだから。まだまだ足りないくらいだ」

三角帽子越しに頭を撫でられる。ちらりと視線だけ上げると、くすぐったいほどやわらかな微笑みが待っていた。

使い古された陳腐な言い回しかもしれないけれど、目に映るすべてがきらきらと輝いて見える。夜空から星屑が降ってくるような、忘れていたはずの涙が滲むほどのまばゆさ。

もう寒くない。さびしがらなくていい。

わたしのサンタクロースは、ここにいます。

「メリークリスマス、陶子」

悪魔くんと天使くん PART1 ここで会ったが百年目

天使が空から降ってきた。

…… 我ながらなんとも陳腐な表現だが、そうとしか言い様のない事実だ。

天使が空から降ってきた。

きらきらと光の粒を纏う金色の髪、陶器のように白く滑らかな肌、襷が流れる純白の衣装。うつ伏せの背中には――まぶしいほど白い大きな翼。

玄関のドアを開けた姿勢のまま、わたしは凍りつくしかなかった。澄んだ朝の空気を肺に送りこみ、何げなく視線を上向けると、冬晴れの空にシミのような黒い影を見つけた。鳥だろうかと考えているうちにみるみる大きくなり、凄まじい衝撃音を道連れに我が家の門前へ落下した。

常人だったら大惨事間違いなしだが、天使は五体満足のままだった。ちよつと遠目にも充分秀丽とわかる面おもてに微かな苦悶の色を滲ませているが、それすら一枚の宗教画になりそうなくらいには余裕である。

「……うつ」

小さく聞こえた呻き声に瞬間解凍されたわたしは、鞆を放り投げて慌てて天使に駆け寄った。気のせいかな、天使が倒れているあたりが淡く輝いて見える。

「だっ、大丈夫ですか!？」

やたらとリアルな翼にぎょつとしつつ肩を揺さぶると、金粉をはいたような長い睫毛が震え、ゆっくりと持ち上がる。現れたのは、天の高みの色に染まったような深いスカイブルーの瞳だった。

蒼いまなざしはぼんやりと宙とさまよい、やがてハッとわたしを捉えた。バンジージャンプも真っ青な大落下を味わった直後とは思えぬ敏捷さで跳ね起きる。

「あ、あ、あな、あなあな、あなた」

どうやら天使は男のようだった。外見的には二十歳をいくつか過ぎたあたり――メフィストフェレスよりも少し下か。しかしあの悪魔も実年齢はその五倍近くあるのだから、人外の見た目などあてにならないだろう。

「あなた、いったい、ここは」

「わたしは普通の女子高生です。ここは日本で、ちなみに我が家の真ん前です。これから学校に行こうと思って玄関を開けたらすごい音がして、あなたが空から」

空を指差してみせると、天使は上を見、そしてまじまじと見つめてきた。

「ではここは……地上なのですか？」

「ええ、まあ。雲の上じゃないですね」

美形に凝視されるというのは、なぜこんなにもむず痒いのだろう。居心地悪く頷くと、天使はふるふると震えて双眸を潤ませた。

「おお、主よ！ 私は無事にあなたの大地に降り立ちましたあ！」

「ひよああ！？」

歓喜の声を上げ、なぜか天使は全力で抱きついてきた。思わず叫ぶ。

「ち、ちかーん！ ちょ、放してください！」

「しかも地上で最初に出会ったのは心優しい可憐な乙女。ああ、私ってば超ラッキー！」

小柄なわたしを子どものようにくるくる振り回していた長身の天使は、一等高くわたしを抱き上げると、うつとりと目を細めた。

「まるで小さな菫の花のようなお嬢さん。私、あなたに恋してしまいましたそうです……」

「変態だー！」

わたしは無我夢中になって暴れた。天使は夢見るような微笑みを浮かべ、その優美な容姿に似合わぬ力強さでぎゅうぎゅう抱きしめてくる。

「どうか逃げないで。この汚れを知らぬ仔羊に、恋という名の罪を教えてください」

「いえいえいえ、慎んでご遠慮します!」

「あなたのその手で、私の翼をみてください。そうすれば、もはや私はあなたの虜」

「セールスお断りー!」

ぱっちり目を閉じ、不気味に迫ってくる美貌を必死に押しとどめていると――再び轟音がとどろいた。

黒い稲妻が視界を駆け抜け、甲高い雷鳴が鼓膜を震わせる。

「ふぎやつ!」

翼に電撃を食らった天使はバシーンツと硬直し、その拍子に転げ落ちかけたわたしの体をよく知る腕が掬い上げた。

「……朝っぱらから、いったいなんの騒音かと思えば」

首筋に落ちる声は、ぞつとするほど低く冷たい。それに反して、彼は優しくわたしを抱え直してくれた。

「べたべたべたべた、うちの陶子に触りやがって……いい度胸してるじゃねえか」

蝙蝠のような漆黒の翼――久しぶりに見た悪魔の証に細い電光を帯びているのは、まぎれもなく我が家の居候、メフィストフェレスだった。

「メフィス、トオ!??」

ほっとして見上げた途端、声がひっくり返った。うつすらと笑みを乗せたメフィストフェレスの糸目からは、凍りつくような赤光が爛々と溢れている。

本気と書いてマジと読む。怒っている。脳内大出血だ!

「陶子、こいつに何かされなかったか?」

「えっと、うん、まだ……」

「まだ――まだ?」

とろけるような甘い笑顔に反比例するどす声がおそろしい。

「え、その、なんていうか……一歩手前?」

「よしよし、そうか——死刑決定」

ほげえ！

ぱりぱりと音を立てて渦巻く黒雷に、わたしはメフィストフェレスの腕を叩いた。

「落ち着け、メフィスト！ さっきので充分だろ！」

「いやいや、灰も残さず蒸発させなきゃ足んないね。他人ひとのモンに手え出したらどうなるか、体で覚えさせてやる」

「だからまだ出されてないってばー！」

ああ、どうして悪魔も天使も人の話を聞かないやつらばかりなのだ。いつそ気絶したいなか、ゆうらりと激しいオーラが立ちのぼる。

「ふっふっふ……まさかこのような場所で主の敵に出会うとは」

ぎらぎらと灼けつくような黄金色の光を膨らんでいく。いつの間
に復活していた天使が物騒極まりない笑みを覗かせた。

「主よ、私を地上に遣わされたのはこのためだったのですね。悪しき魔物の毒牙から清らかなる乙女を救い出せと！」

絶対違う。

勘違いも甚だしい天使は、これまた迷惑このうえないことに、すこぶるノリがいいようだった。金の炎が大きくうねり、鎌首をもたげて牙を剥く。

「はっ、正義を振りかざす独善者が。上等だ、ご自慢の翼をむしり取って地に叩き落としてやるよ」

対するメフィストフェレスは、実に悪魔らしい酷薄な笑みを返す。

闇色の雷電が凶暴に閃いた。

冬は早朝——つとめて悪魔と天使の非常識合戦。

早起きは三文の得など嘘だ。三文どころか千両の大損だ。

明日は絶対二度寝しよう。遠い冬の空を見上げ、わたしは固く誓った。

悪魔くんと天使くん PART2 旅は道連れ世は情け

「たいへん失礼いたしました。私の名はラファエロ、天上にて主の御許に侍ることを許されし者」

姿勢よくソファに座った天使は、そう言つて深々と頭を下げた。

いや、今は天使と言うにはふさわしくないかもしれない。翼をしまい、服装も現代相応なこざっぱりした白いシャツとジーンズに改めていた。肩の上で波打っていた金髪も、襟足が少し長い程度に収まっている。品のよい留学生の青年——そんな印象だ。

あわや特撮も顔負けの修羅場と化しかけたところをどうにか抑え、家の中へ避難した。さすがの騒ぎに、ご近所の方々が駆けつけてきたからである。わたしの従兄を名乗っているメフィストフェレスが口八丁で丸めこんでいたが、彼の口の達者ぶりにはじめて感謝した。学校は——この際サボつてしまおう。

あたたかい紅茶を一杯飲んで、頭に血がのぼりすぎていたラファエロもどうにか落ち着いたらしい。こうしてみると、思慮深げな美丈夫である。

しかし、しかししかし。

「ラファエルつて、すごく偉い天使なんじゃ……」

確か大天使とかなんとかのひとりだとか、以前読んだファンタジ―漫画にあつたような。

「癒しの天使、旅人の守護者だな」

わたしの隣を陣取ったメフィストフェレスがどうでもよさげに言った。赤い瞳も黒い翼も収め、普段どおりの姿だ。

「神代の頃ならいざ知らず、今の時代にそんなお偉方がはいほい下界に降りてくるなんて思えないけどなあ？」

「畏れ多くもかのお方と同じ御名を賜りました。しかし若輩の身には過ぎたるもの。ゆえに発音を変えて、ラファエロと」

ラファエロは淡く微笑んだ。天空を写し取った瞳には灰色が混じ

り、冬の荒海を思わせる色彩に変化していた。

人外には同性同名が多いのだろうか。

「若輩ってことは、まだ若いのか？」

「ええ。私は『生まれて』から百ほどの年月しか数えていません。同世代の同胞のなかでもひと際未熟で……いつも失敗ばかり」

天使はため息をついた。けれどすぐに表情を明るくする。

「しかし、このたび主御自ら命を下さったのです。『地上へ下り、天界の静寂と安寧を取り戻せよ』と」

「……それって謎かけ？」

「私も詳しくは……しかし答えを紐解く苦難も、主が私に与えたもうた愛という名の試練なのだと思います！」

頬を上気させ、ラファエロは拳を握る。その様子に、わたしはふと先ほどの騒ぎを思い出した。

いったん火が点いたら、彼の暴走を鎮めるのはなかなか難しいだろう。さぞ天界の人々は苦労したに違いない。

……あれ？

ラファエロは『天界の静寂と安寧』を探しにきたわけだが、その目当てのものがなくなっただのはむしろ彼のせいではないか？

天界の静寂と安寧を取り戻す——天界一のお騒がせ者をつまみ出す。

「……それって左遷されたんじゃないの？」

冷めたメフィストフェレスの呟きに、わたしはとっさに隣の膝をはいた。

「失礼な。地上でも『かわいい子には旅をさせよ』と言うのではないですか」

「『かわいさあまって憎さ百倍』って知ってる？」

柳眉をひそめる天使に、悪魔はにやりと薄く笑う。わたしは更に強くメフィストフェレスの膝を打った。

「いつて。何すんだよ」

「余計なことを言わんでいい！ 世の中には知らないほうがいいこ

ともあるだろっ」

小声で怒鳴ると、彼はひょいと肩を竦めた。小馬鹿にしたような態度に今度は腿をつねってやろうかと睨んでいると、じっと見つめてきたラファエロが口を開いた。

「陶子さんは、そこなる悪魔と契約を交わした魔女なのですか？」

「はい？」

「あなたは悪魔に心を許しているように見える。それほど親しい距離にあるならば、魔女と使い魔でもおかしくありません」

探るような視線に、わたしは思わずメフィストフェレスのそばに寄った。自然な動作で後ろに腕が回される。

「いんや、俺はまだだれとも契約を結んでないぜ。お遊び気分の召喚者に逃げられちまったんでね、宙ぶらりんの仮契約状態だ。こいつは俺の居候先の家主ってところ」

「それにしてもいぶんと、入念に 印 を刻んでいるんですね。幾重にも。これは『庇護』というよりも……まるで『所有』だ」

「唾つけたんだよ。虫除け代わりだ」

どんどん不機嫌になっていくラファエロとは反対に、メフィストフェレスは悦に入っている。なんだか今度は、彼から逃げたほうがいい気がしてきた。

「そうですか……」

ラファエロは一瞬目を伏せ、キツとメフィストフェレスを睨み据えた。

「それではやはり、私の考えは間違っていないかったですね！」

「なんでそうなるのだ。」

完全にわたしを置き去りにして、ふたりは（主にラファエロが）すたこらと話を進めていく。

「なんと不埒で狡猾な。逃げ道をちらつかせながら必死にもかく蝶をなぶり、舌なめずりする毒蜘蛛のようだ」

「褒め言葉だな。悪魔の性分はあんたがよく知ってるだろ？」

「よくもぬけぬけと——恥を知りなさい！」

ラファエロの一喝とともに光が弾ける。滲み出す金の陽炎に、わたしは悲鳴を上げた。

「ちよ、家が壊れるからやめてくれ！」

あんな少年漫画的バトルをくり広げられたら半壊どころでは済まされない。人外災害に保険なんてないのだ！

「あつ……すみません」

揺らめく光は小さく萎んでいく。しゅんとしたラファエロは、耳を伏せて頂垂れる大型犬を連想させた。

憎たらしいのだが、どこか憎めない人である。

「そこまで落ちこまなくても……わかつてくれればいいし」

「……陶子さん」

青灰色の瞳がぶわりと水気と熱を帯びる。なんだか首の後ろに嫌な予感が。

「ああ、あなたはなんて慈悲深い方なのでしょう。あなたは必ず、この私がお救いしてみせます！」

「いや、あの、だから」

「悪魔があなたを欲望の鎖で縛るなら——私はあなたに祝福の盾を」
え、と間抜けな声しか出せない。ラファエロは場違いなほど厳かに、高らかに宣言した。

「これより不肖このラファエロ、陶子さんの守護天使を務めさせていただきます！」

「はいい！？」

「いついかなるときも、あなたのおそばに——げふっ」

弾丸のような速さで飛来したクッションを顔面に食らったラファエロは、そのままソファにひっくり返った。投手はだれかなんて考えなくてもわかる。

「よし、そんなに殺してもらいたいなら喜んでさっくり逝かしてやるよ」

両手の指をばきばき鳴らしながらメフィストフェレスが立ち上がる。寒気が走るような笑顔に、もはや叫ぶ気力もない。

ああ——わたしの平穩はいずれ。

悪魔くんと五十歩百歩のバレンタイン（前書き）

ブログのキャラクターアンケート企画のお礼作品です。ご回答くださった梶原ちな様に捧げます。

特別編につき、メフィストフェレス視点でお送りします。

悪魔くんと五十歩百歩のバレンタイン

この世には、何事にも不器用な人間が存在する。

包丁を持たせれば指を切り、縫針を持たせれば指を刺す。つまり、刃物を持たせれば大なり小なり流血沙汰を引き起こしてしまう人間が。

上村陶子という少女は、悲しいかな、その範疇に括られてしまう人物だった。彼女の不器用さは、馬鈴薯の皮を剥くためにピーラーを持った十秒後に、キッチンで阿鼻叫喚地獄に変えたという伝説の域である。上村家の家事を預かることになったメフィストフェレスが、早々に陶子のキッチンへの出入りを禁じたのは言うまでもない。

陶子は、いまどきの女子高生にしては珍しく、年上からの注意を素直に聞き入れられる娘だったので、渋々ではあるがメフィストフェレスの決定に従った。そして彼女は、ときに堅苦しいほどの真面目な性格でもあったので、以後一年ちよつとの同居生活のなかでその約束が破られることはなかった。

だから、その日、その事件が起きたことは、メフィストフェレスにとってまったくの予想外だった。

彼に落ち度があったとすれば、二月十四日という日付の持つ意味と、陶子も年頃の女の子だったということをすっかり失念していた点である。

玄関のドアを開けた瞬間、押し寄せてきた異臭に、メフィストフェレスは「ただいま」の言葉を呑みこんだ。

「ちよつと、こんなところで突っ立っていないでください……」

後ろでぶつぶつ文句をこぼしていたラファエロも、白皙の美貌を大いに引きつらせる。ひとりの少女を挟んで微妙な敵対関係にある

悪魔と天使は、思わず顔を見合わせた。

「……なんですか、このにおい？」

「俺に訊くな」

上村家に新たな居候が転がりこんだのは、ついひと月ほど前のことである。天界から文字どおり『落ちてきた』ラファエロが、すつたもんだの末、陶子の守護天使の座に収まってしまったのだ。若紫を自分好みの美女に育て上げた光源氏よろしく、十七歳という年齢にしては幼い面のある陶子の成長を辛抱強く待ち続けていたメフィストフェレスにとって、厄介極まりないライバルの登場だった。

もともと水と油のごとく相容れない存在であるうえに、陶子という互いのプライドにかけて譲れない存在が加わり、ふたりの間に散る火花は日に日に激しくなる一方だった。当の陶子が、人外同士の一触即発モードに頭痛や胃痛をもよおしていることなどおかまいなしだ。

今日も、夕飯の買い出しにどちらが陶子と行くか揉めに揉め、結局「いいからふたりで行ってこい！」と彼女に蹴り出された始末である。

買いものの最中も、夕飯のメニューで張り合い、おかずの具で張り合い、帰り道では荷物の押しつけ合いをしていたら、予定外に時間を食ってしまった。ようやく帰ってきてみると、何やら不穏な異臭が家中に充満している。

吐き気がするほど甘ったるく、それでいて焦げくさい——煮詰めに煮詰めた砂糖を火にかけたような。

においの発生源がキッチンであることに気づいたメフィストフェレスは、手に提げていたエコバックをラファエロに放り投げると、スニーカーを脱ぎ捨てて家に駆けこんだ。

「陶子！」

キッチンにつながるダイニングのドアを開けると、いつそうきつい異臭が鼻腔を刺激する。思わず顔をしかめた彼の目に、キッチンの入り口でへたりこんでいる陶子の背中が飛びこんできた。

「おい、陶子！」

余裕を忘れて駆け寄ると、少女はのろのろと振り向いた。茫然と見開かれていた双眸が悪魔の姿を認めた瞬間、一気に潤んだ。

「……メフィストお」

いかにも頼りない涙声、信頼ゆえの安堵が滲む上目遣いに、メフィストフェレスはぐつと息を詰まらせた。おそらくキッチンに立っていたのである。彼女が身につけているエプロンが、自分が愛用しているものだ気づくと、更にくぐもった奇声が洩れた。

ある意味、男にとってはたまらない光景だった。

ぐらつく理性を鋼の意志で締め上げた彼は、陶子の傍らに膝をついた。顔を覗きこむと、気まずそうに視線を逸らす。

「で、何しでかしたんだ？」

ちらりと横目に見やったキッチンの惨状は、筆舌し尽くしがたいものだ。今夜は出前をとるしかないかもなあ、と現実逃避したくなる有り様だ。

そつぽを向いたままの陶子にため息をつき、メフィストフェレスは彼女の両手を持ち上げた。血のにおいはしないので大事はないだろうが、念のための確認である。

しかし、メフィストフェレスが傷の有無を確かめることはできなかった。なぜなら、陶子の手にはべったりと褐色の物質がこびりついていたのだ。

異臭の元と同じ、こちらはひたすら甘いだけの香り。メフィストフェレスの体温にゆつくりと溶け出す感触。

「……チョコレート？」

ぽつりとこぼれた呟きに、陶子がうぐぐ、と声を詰まらせる。

ではこの異臭は、チョコレートを溶かそうとして失敗した末の産物か。

「なんでおまえ、こんなもん——」

尋ねかけたメフィストフェレスは、ふと今日の日付を思い出した。二月十四日はバレンタインデー。昨今では『義理チョコ』や『友

「チョコ」が主流になっているが、日本における本来のバレンタインデーは、女性から好意を持つ男性にチョコレートを贈るイベントである。

「……そういえば去年のバレンタインデー、近所のコンビニで売ってたチョコレートだったから、『どうせなら手作り持ってこい』って言ったんだっけ？」

こみ上げてきたくすぐったさを、反射的に意地悪い笑みでごまかす。陶子の顔は面白いほど真っ赤に茹で上がっていた。

「べっ、別にだれもおまえのために作ったなんて言っていないだろ！」

「照れない照れない。だいたい、俺以外のだれがいるってんだよ？」

「それは……ラ、ラファエロとか！」

天敵の名前に、メフィストフェレスはすっと笑みを消した。たとえ照れ隠しとしても、陶子の口から自分以外の男の名前を聞かされるなど我慢ならない。

「陶子」

熱をこめてささやくと、細い肩がびくっと跳ねた。大きな瞳が自分だけを映して揺らいでいる事実、仄暗い喜びが滲み出す。

ああ、そのすべてを喰らい尽くすことができれば——どんなに幸せだろう。

「おまえは、俺のことだけ考えてればいい」

捕らえた両手にそっと唇を寄せると、陶子は小さな悲鳴を洩らした。やわらかな指先に舌を這わせ、丹念にチョコレートを舐め取っていく。

舌先でとろける甘美な味が、はたしてチョコレートなのか、それとも少女自身のものなのか——その両方なのかもしれない、と悪魔は思った。

「……っ」

震える吐息に、男の本能がぞくぞくする。最後のひと舐めを終えて顔を上げると、陶子は頬を上気させて喘いでいた。

「気持ちよかったか？」

「……っ！」

からかうように問うてみると、涙目で睨まれる。メフィストフェレスは笑いながら少女の体を抱き寄せ、ふと表情を改めた。

「なあ、陶子」

「な、ん……」

「俺はいつだって、おまえのことだけ考えてるよ」

額を合わせるように顔を寄せると、陶子は驚いたように目を瞬かせた。メフィストフェレスはひどく切ない心地で微笑む。

近づいても近づいても届かない——焦がれるような甘い痛みの意味を、今こそ陶子に伝えたい。

自分はもうとつくに、彼女に恋しているのだと。

「メフィ……」

物言いたげな桜色の唇をそのまま封じこめようとして——、

「悪魔退散——ッ！」

「ぶはっ!？」

勢いよく横つ面を直撃した重みに耐えきれず、床に倒れこんだ。ごろごろと顔の上から転がり落ちる野菜に、夕飯の材料が詰まったエコバックを投げつけられたのだと知る。

「ああああ、なんという破廉恥な！ この不埒な悪魔め！」

ダイニングの入り口で喚いているのは、他でもないラファエロである。どうにか起き上がったメフィストフェレスは、痛む頬を押さえて怒鳴った。

「てんめ、何しやがる！」

「陶子さんの守護天使として当たり前のことをしたまでです！ あなたこそ、雰囲気に乗じて何をしようとしていたんですか！」

「何って、キ——」

「このセクハラ悪魔あつ！」

次の衝撃は、予想外にも鳩尾だった。

「ぐふ……!？」

「馬鹿っ、馬鹿馬鹿、メフィストの変態！」

容赦ない陶子の拳に呼吸が詰まる。彼女はこれ以上ないほど赤面しながら、叫んだ。

「そういうことは許可を取ってからにしろ！」

調子を取り戻したメフィストフェレスが「つまり許可を取ればオツケーなんだな？」と陶子に詰め寄り、再びラファエロをぶちギレさせるのは、後日の話である。

悪魔くんのシークレット・トリック（前書き）

この短編は、『悪魔くんとスイート・ハロウィン』直後のエピソードとなっています。前話からお読みになれることをおすすめします。

メフィストフェレス視点でお送りします。

悪魔くんのシークレット・トリック

物事とは、なかなか思惑どおりに進まないものである。

「……やれやれ」

腕の中で気を失ったきり目覚める様子のない少女に、メフィストフェレスはため息をついた。固い三和土に座りこんでいるため、そろそろ尻が痛くなってきた。

ぐったりと力の抜けた体を抱え直して立ち上がる。悪魔であるメフィストフェレスにとって、重力などあつてなきに等しいが、それでも陶子はとても軽かった。

とりあえず彼女の部屋へ連れていこうと考えたところで、ふと目の前に階段が立ち塞がった。裾の長いマントはひらひらと足にまとわりついてくる。

メフィストフェレスは小さく舌打ちした。

そもそも、この仮装は陶子のため（本人は断固として嫌がらせだと反論するだろうが）に用意したものである。当の彼女が意識を失っているのは、まったくもって意味がない。

なんとも虚しいようなやるせないような気持ちになって、メフィストフェレスはため息を上塗りした。間違いなく、自分は男として哀れた。

階段の前で突っ立っているわけにもいかず、爪先をリビングへ方向転換する。数人がけのソファに腰を下ろすと、陶子を横抱きにしたまま膝に乗せた。

さて、どうするか。

姫君は未だ夢の世界からお戻りにならない。呼吸は落ち着いているから心配いらないだろう。メフィストフェレスは、まじまじと少女の寝顔を見つめた。

「……前言撤回」

これはこれで、ある意味おいしい状況ではないだろうか。現に口

元がにやけてしょうがない。

もともと陶子は幼い顔立ちをしているが、瞼を閉ざした今はいつそうあどけない印象が際立っている。薄く開いた唇がなんとも無防備だ。

白桃のような頬につくてみる。反応がないことを確かめ、メフィストフェレスはやわらかな輪郭を掌で包みこんだ。

こみ上げてくる想いは、決して愛しさばかりではない。自分が男、陶子が女である限り、生々しい欲望は常に牙を剥く瞬間を待ち望んでいる。

その事実を否定するつもりも隠すつもりもない。恋が綺麗事で終わるはずなどないのだから。守りたい、大切にしたいと思う一方で、だれもが獣のような激情を胸の奥に飼っている。

ただ、メフィストフェレスは口にしないだけだ。

ようやく自分を異性として意識しはじめたばかりの陶子に、積もりに積もった恋情を理解することなど不可能だ。受け入れてほしい相手を壊してしまつては本末転倒である。

ゆっくりでいい。どれほど時間がかかろうと、彼女が心から自分を望んでくれるまで待ち続ける。

「ただし、逃がすつもりは更々ないけどな」

目元にかかった前髪を掻き上げてやりながら、悪魔は低く笑った。そつえば、『お菓子の代わり』をまだいただいていない。頭になつた白い額に、メフィストフェレスは笑みを深めた。

「なんたつて今日はハロウィンだし？」

何もくれないのなら、おばけにいたずらされても仕方ない。気絶中という不可抗力は無視させていただこう。

メフィストフェレスは身を屈め、陶子の額にそつと唇を落とした。眉間の上に残つた紅い痕を確かめて、思わず喉を鳴らす。

「なあ、陶子」

耳元でささやくと、微かに少女がみじろいだ。ぬくもりを求めるようにすり寄ってくる。

かわいいかわいい、俺のお姫様。

「吸血鬼が眠り姫のどこに口づけるか——知ってるか？」

メフィストフェレスはゆっくりと、首筋に落ちる陶子の髪を払いのけた。

意識を取り戻した陶子が、前髪の下と襟元から覗くキスマークに悲鳴を上げるのは、一時間後のことである。

俺と女王様と悪魔くんの初夢パラドックス（前書き）

2009年新春企画。『俺と女王様』シリーズとのクロスオーバー。
『俺と女王様』シリーズの主人公・はじめ視点でお送りします。

俺と女王様と悪魔くんの初夢パラドックス

これは夢だ。夢に決まっている。

よし、とりあえず落ち着いて頬をつねってみよう。……痛い。

肉をつままれ、引つ張られる地味な痛さ。

「よくできた夢だな……」

「何ひとりでぶつぶつ言ってるの？ ものすごく不審人物なんだけど」

隣から突き刺さる視線の鋭さまでリアルだ。最近の夢は現実感に溢れまくっているんだなあ。まったくもって人類の進歩！

「本原くん、気持ちはものすごくわかるんだが、痛々しいからやめてくれ……」

上村（うえむら）の哀願に、俺は超重力を食らってがくりと崩れ落ちる。同い年にしては小柄な少女の隣では、やたらと目の細い男が「ほうほう」とわざとらしく頷いていた。

「あんたが『俺』か。てえことは、お隣の彼女が噂の女王様？」

「神崎苑香よ」

どうしておまえは平然としていられるのだ。いつもどおり偉そうな口調で名乗った俺の幼なじみに、変態の疑惑を持つ悪魔はにっこりと笑んで、それはそれは優雅な一礼を決めた。

「お初お目にかかる。我が名はメフィストフェレス。魔界に棲まう闇の眷属にして、人の世においては悪魔と呼ばれしもの。女王陛下におかれましてはご機嫌麗しゅう、何よりと存じ上げる」

「うむ。苦しゅうない、面を上げよ」

どうしてそんなにノリノリなのだ……。

心のなかで虚しいツツコミを入れるしかない俺の肩を、上村が無言で叩いた。

俺の記憶が正しければ、今日は新年第一日目、つまり元旦。例年のように両親や幼なじみ一家とともに、初詣に行ったりおせちに舌

鼓を打ったりお年玉の金額に唸っていたりしていたはず——なのだが。

父さんとおじさんの酒盛りに無理やりつき合わされ（もちろん俺はオレンジジュースだ。未成年は飲酒禁止！）、根掘り葉掘り彼女とのことを追及されていたあたりで記憶が途切れている。

「しっかし、なんともおかしい初夢ね」

「……は？」

初……夢？

「やっぱこれって夢なのか？」

「そうじゃなかったらありえないでしょ」

彼女は呆れているというよりも馬鹿にしきつた目で睨んでくる。ちくしょう、おみくじの『凶』がこんなところで発揮された！

「んー、正しくは夢であり現実でもあるってところかな」

メフィストフェレスはひよいと肩を竦め、狐の面に似た奇妙な笑みを浮かべた。

「夢だからこそ『ありえないこと』が『ありえること』になる。潜在意識下での現だからこそ逆説が裏返る」

「……メフィスト、言ってることがさっぱりなんだが」

こめかみを押さえながら上村が唸る。常々悪魔の言動に翻弄されているだろう苦労が滲む姿に、涙と親近感を抑えられない。

途端に悪魔の笑顔が甘くなった。ブラックコーヒーが真っ白になるまでミルクとガムシロップをぶちこんだような。

どこにでも視覚的暴力に訴える色ボケはいるのだな……。

「そうだなあ。つまり、この夢は俺たちが眠りながら見てる夢であると同時に、共有の精神世界で起こってる現実——ってことだ」

「……………要するに、わたしたちは幽体離脱して魂だけの状態で顔を合わせてるってことか？」

「うーん。違わなくもねえ、かな」

魂までは飛ばしてないんだけどねえ、とメフィストフェレスは呟いている。どういう理屈にしろ、非現実なことには違いない。

「ぜんぜん世界観が違うんですけど……」

こちらとおたくと違ってラブコメの看板しか掲げていないのだ。

……胸を張ってそうだと言いきれないあたりが悲しいが。

「だから、それが『ここ』の法則なんだろうが。いつまでぶちぶち文句垂れてんのよ。まったくみみっちい男ねえ」

「悪かったな、みみっちくて！　ひとりくらいこういうやつがいねえとボケ倒しになるだろうが！」

「おいそのヘタレ。うちのとーこたんのツツコミじゃあ足りねえってのか？」

「とーこたん言うな！　だいたい、わたしひとりじゃおまえたちのボケなんて捌ききれないわ！」

「あべしっ」

ぶへつと奇声めいた呻きを上げて、色ボケ悪魔が地に沈む。むう、なんとキレのある裏拳なのか。

「気にしないでくれ、本原くん。きみがいるお陰で大いに助かった。特に精神衛生的な意味で」

「上村……」

俺たちはがしりと固い握手を交わした。掌から伝わる熱い友情……！

「カノジョの目の前で浮気なんて、いい度胸してるわねえ」

「あだ、あだただだっ！　痛い痛い、耳がちぎれる！」

ぎりぎり片耳をねじ上げられ、俺は悲鳴を上げた。犯人である女王様は、目を逸らさずにはいられないような笑顔で凄んでくる。

「いつそちぎれちゃいなさいな。涙に濡れる乙女心も聞こえないよ　うな飾りものなんて！」

「俺はテレパシストじゃねええ！」

「愛の力でなんとかしなさいよ！」

そんな無茶な。愛の力でテレパシー可能なら、この世に電話は発明されていない。

どうして俺の恋人は、もう少しかわいげのある方法でやきもちを

焼いてくれないのだろうか。

まあ嘆いたところでしょうがない。女王様であることこそ、彼女の彼女たる所以なのだから。そんな幼なじみにすっかり恋してしまった、すべては惚れた弱味である。

気が済んだらしくようやく耳が解放されたところで、俺はふてくされている彼女の頭を軽く叩いた。

「あのなあ、俺が浮気するとか思ってたんのか？」

「あたし以外の女と手えつなぐなんて立派な浮気よ」

「どんだけ心狭いんだ、おまえは……」

「じゃあはじめは、あたしが目の前で別の男と仲よさそくに手えつないでても平気なわけ？」

じろりと睨み上げてくる深い色の双眸に、俺はうつと言葉に詰まった。

……かなり、いやまったくもって許しがたい。

顔に胸中のすべてが出たのだろう、途端に彼女はにやにや笑いを広げた。

「わかったらもう二度とやらないように」

「……了解」

掌の上で遊ばれているというか、頭が上がりないというか。安易に予想できてしまう未来図にため息をつきたくなった。

「……どうしよう。わたしはどうすればいいんだ」

「いやいや。まったくお熱いことで」

途方に暮れた上村とメフィストフェレスのなげやりな呟きに、慌てて我に返る。そういえば今更なのだが、どうすればこの夢は覚めるのだ？

その疑問に、メフィストフェレス先生が実にあっけらかんと答えてくれた。

「まあ所詮『夢』だからな。肉体が眠りから覚めれば、自然と意識も現実世界に引き戻されるさ」

「それまでどうしろと……」

「こたつにでも入ってごろごろしながら、蜜柑を食べてるってことじゃない？」

ほら、と彼女が指し示した先には、大きめのサイズのこたつがでんと陣取っていた。卓上には、籠に盛られた蜜柑の山。瑞々しいオレンジ色が目にも鮮やかだ。

「え、えっ？」

上村が動揺するのも無理はない。俺たちはいつの間にか、六畳ほどの和室にいたのだから。では、先ほどまでどこにいたのかというと――わからない。

明るかったか暗かったのか、暑かったのか寒かったのか。まるで霧のように朧げで、具体的な記憶を結ぶことができない。

「その場に集う意識が共通の認識を持てば、それが現実となる。いやあ、まったく精神世界ってのは便利だよなあ」

混乱したままの上村の手を引き、いそいそとメフィストフェレスがこたつに入る。専門家というのは、一般人を置き去りに順応してしまうからたちが悪い。

「ねえ。突っ立ってたってしょうがないから、あたしたちも座ろうよ」

「……そうだな」

能天気というか無邪気というか、どこだろうと揺らがぬ彼女の笑顔に、俺は脱力しながらも苦笑した。

きつとこの出会いは一期一会。どこかのだれかの気まぐれが生んだパラドックスの奇跡。いずれは覚めてしまう夢ならば、心ゆくまで満喫しようではないか。

ぬくぬくとこたつであたたまり、蜜柑を食べながらしゃべり倒す。そんな初夢も悪くない。

ではまず、この言葉からはじめようか。

――あけましておめでとう！

c e (A
f i h
r s a
t p
d n
r e w
a y
m e
o a
f r
t !
h a
e n
y d
e ,
a h
r v
) e
n
i

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7695f/>

となりの悪魔くん

2011年7月17日21時42分発行